

心理学的認識論からのアーラヤ識の一考察

佐藤 彰 頭

一、まえがき

唯識説によれば「一切諸法は、心が対象を識別する働きにもとづいて、そこから現われたものである。」と説き、さらに「一切諸法は、客観的实在物としては、存在しないものであるから空である。しかしそれは、現実世界が虚無であるということではない。一切諸法は、その潜在的可能態である種子の形において識に内在し、その識の分別作用によはて外界に表現されるとき、現実世界の差別相が成立する。識は、眼識……（中略）……意識 マナ識、アーラヤ識の八種の働きがある。後の二識は、唯識学派が創説したものである、アーラヤ識は、根本の識であつて、種子を維持し、他の諸識を生起せしめる依り所となる。」と説いている。上述の中で特に点をほどこした部分を、実験心理学、認識論的心理学の立場から考察する。

二、アーラヤ識は構成概念で遺伝的能力か、

マナ識とアーラヤ識の二識は、唯識学派の創説したものであるという論述は、心理学的認識論の立場からみると、アーラヤ識は、構成概念（眼識から意識までの実体極念ではなく、概念を構成したもの）と推測される。また、一切の諸法は、その潜在的可能態である種子の形において識に内在するという論述は、

一切の諸法は、人の中に遺伝的能力として存在していることを假定しているようにも推測される。アーラヤ識は、一切の諸法を種子と形で維持しているという論点からみて、認識論的心理学上興味あることは、いかにアーラヤ識を刺激して（教育して）、一切の諸法の種子をひらかせるかということである。

心理学の發達の語源的意味は、包みをとくという意味である。心理学にとつては、包みをといて、一切の諸法を開発する方法が、問題となる。唯識学派の開発の方法と心理学の学習理論との關係を考察する。

三、正しい認識とは何か―知覚レベルからの考察

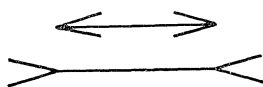
一切諸法を開発する方法と学習理論との關係を論述するにあつて正しい認識とは何かについて一つの疑問を提出しておく。心理学の知覚レベルで錯視（図一）という事象がある。

図一について、二本の線分は、物理的には、

同じ長さの線分である。しかし人間にとつては、上の線分が下の線分よりも短かくみえることは、心理学の研究から明らかである。

ところで認識論の立場から考察すると、この錯視という事象について三つの認識の立場が成立であらう。

第一に（図一）で上の線分が見たところ短くみえるので、上の線分が短く正しい認識であるとする立場がある、第二になるほど見たところは、上の線分は短くみえるけれども、正しい尺度（この場合は、ものさし）で測定すれば、等しいのであるから、二



〔図一〕錯視と認識の立場

つの線分は等しいとするのが、正しい認識であるとする立場がある。第三に、上の線分が短いというの、また二つの線分が等しいというのいずれも正しいものではなく、正しい認識は別にあるとする立場がある。ところで唯識学派のいう正しい認識とは、上の三つのどの立場に立っているのかが明確になつていないのではなからうかというのが心理学からみた疑問である。

四、アラーヤ識を刺激する方法—S—R理論からの考察

アラーヤ識を刺激して、一切の諸法の種子を開発させる方法について、S—R理論（行動主義心理学の刺激—反応理論）から考察する。

アラーヤ識を刺激する方法は（図二）のとおり、三つの方法が考えられる。第一は、潜在説で、これは、二つに分けられて、殺説と転換説である。第二は学習説（聞薰習説）である。それぞれの説について考察する。殺説では、正しい認識尺度（A）は、種子で潜在している。一方誤認識尺度（B）も種子で潜在している。学習上は、（A）の種子を開発し、（B）を殺すことによつて正しい認識を得る。転換説では、（B）のみが潜在していて、（B）が転換して、（A）になり、正しい認識尺度を得る。ところでこれら二つの説で、刺激（S）は、教材、教育方法となるもので、殺説では、（A）に働きかけ、転換説では、（B）に働きかけるわけであるから、働きかける対象がことなるので、ことなつた刺激が与えられるべきであらう。学習説では、

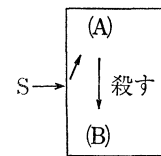
刺激によつて、（A）を形成し、（A）が（B）を殺すか、もしくは（A）が正しい認識を可能にするわけである。

唯識学派の認識が、上にのべた、殺説、転換説、聞薰習説のいずれ

心理学的認識論からのアラーヤ識の一考察（佐藤）

1. 潜在説

(イ) 殺説



S: 刺激 教材となるもの

R: 反応 正しい認識

(ロ) 転換説

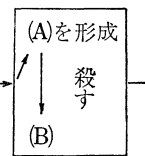


(A): 正しい認識尺度

(B): 誤認識尺度

2. 学習説

(聞薰習説)



〔図2〕

説であれば、学習に最適の時期はいつかが究明されなければならない。（今後の課題三）心理学的立場で研究されている問題である。）また修行の方法（学習の方法）と止観との関係についての究明が必要であらう。（今後の課題四）

の説に立っているとしても、認識（正しい認識のこと）が習得されるには、五位という修行方法が確立されている。筆者のみるところ、三つの説の立場によつて修行の方法が細分化される必要があるのではなからうか。今後の課題のひとつであらう。唯識学派の認識論が、すでに大人になつた人を前提に論述させられているわけであるが、幼子から大人への発達の中で、認識がいかに変化するかが究明されなければならないであらう。（今後の課題二）さらに、殺説であれば、認識の種子を殺す最適の時期は、いつか、転換説であれば、誤認識の種子が正しい認識に転換する最適の時期はいつか、聞薰習